

KODAK COLOR CONTROL PATTERNS
LICENSED PRODUCT
© The Friten Company, 2000



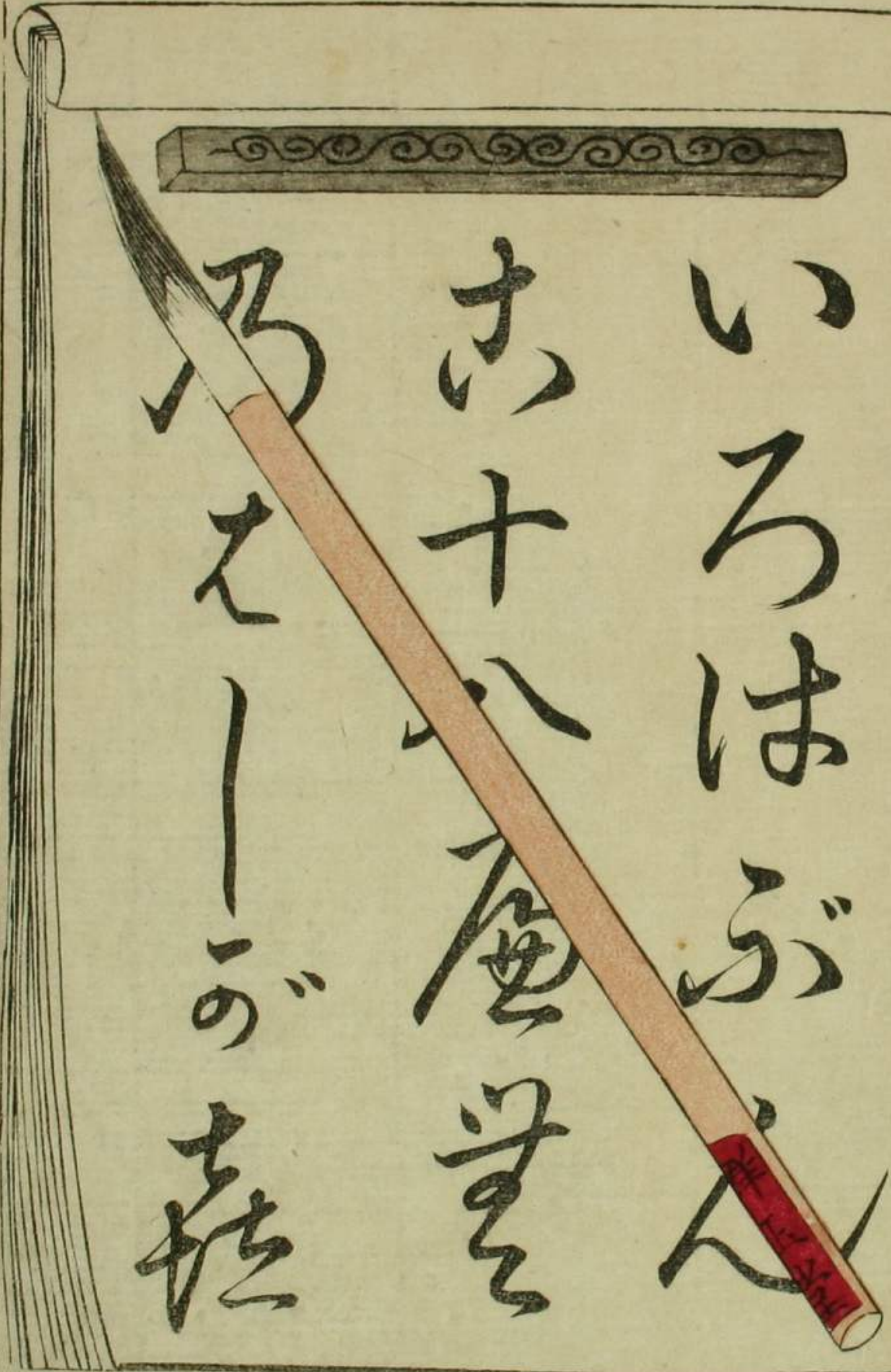
正史
い
ろ
は
文
庫
十八編
上
實傳

へ遠13
1807
52



特 13
1807
卷 52

いろはぶん
志十八巻
乃えしのかた



一、ひらひら一、ひらひら字字づつ二、ひらひら五、ひらひら六、ひらひら字字と
ら菅秀才のきんしん重言然其手習子
屋や尔ちちん因いんあるげおお題だいくく名な子こ何なにふふのの名
は久く字じままどど難なん波は津つ灰はいらら何なに覚かくえ
あはあ知ち量りやうとと心しん正せい家け生せい乃の傳でん記きを
讀よくく分ぶん解かいをを専せんああちち人にん綴ずいるるををも

て或あるハハ伊い語ご也や架か仮か字じ遠えんぶぶありあり素そ
とありあり夫おとこ人にん君きみ子こ早はや紅こう覚かくにに入いるる屋や更さら
やうやうとと由ゆ義ぎ災さい戲ぎのの冊さつ子こをを合あ更さら子こ
ああととぐぐくくとと糸いと子こ恁おんくくとと言いをを打うちちをを鳴な
吟ぎん俺おんああぐぐとと久くととくくとと志しのの事こと也や

とあら
か

為水真水也



干葉
三郎兵衛
光忠

義黨一個子
人

渡更照連
を討僕
の恨を
清時塩谷
家の臣堀
部兵衛
招致して
高員子君
是



和佐山の藩士
鬼七五郎照連

光忠八原下総の国干葉
の郷士あり適伊勢西宮
へ参詣做人と老僕
一個召俱して
三島の宿
件の
老僕
過て照連子麻呂の
振廻せし照連怒て他と
听せ光忠松の僕首を破て照連



芝泉岳寺
 海岸
 眺望



東都

正史 實傳 いろは文庫 卷之五十二

東都 為永春水著

第百三回

さういふ申す所のいおどが氣持の口本不流石舌ごとと振
 切つてゆきぬやうよは掛らぬ弱くも猪口をぬて
 酒がわしとく遠くまで自と面の和らぐ成つてくす白
 竊り小物拾あろし是ぞ大き息を吐きしは酒の
 産物のぬけいまり 海なる業あるゆへ妻供俱ふ種

世にあらんとは依るもの獨りあつて可きつらき事
あるうらり歳に十六七あるつてもまじく赤子の指ふ持
でお在のうも幼きやせんまじくあけきいひんやう御事
んを推してさつて迷つて居るさうのう何せそ如等
うと男のせまやうら今の前の嫁跡を入きく表面ど
んふよ手と替へおと替へく言はせうらと言つて申
アイト返す中成るさうなまでんぬりやと申すそ如く私
の思ひぬそよお建よりか人の茶の隅のお師匠さん

ともあつてつらお牙子もたそりぬつのおそ女さんもお
茶が好む同指お替古びあさると言ふまじく何うまじく
若くお歌をもお茶の替古びあさるとけく歌内へ出言入り
はくは成くお在るさうなむおを替へて袂の中へちと
いとお舟をおのせあさる位の間いごさひややうり
然らうとくは成り強いおやでい編居あおかでも今
時の娘ふすお七りもあつて色業の如くおあのお
いぬいすせん如く若く歌が歌るアお高藤と来てお

やうらうらゝゝなな熱いお合ああらざういお在は成
やちんヨ熱うして内寝が出来さうぞい親の進が
何と云はれらうともけ方のおで何いませうら好
あ御合が出来やうと悪法うい知りません
が私の考ごとい是が一番直及うと思ひませう何
振ぶごさいませう「あゝあどこりやう業がはあ
ごあうくお肉身さんも陽ういませぬくお暇を
おけしりお知あをとおいませうと子に可サそん事

娘つらや舌づくごさいませう是はあんの鼻え田葉
ごらんやう肉の人々困る様子をううまう田い付
のくごさいませうら終又お抱ぐとらうらうら田
葉あそつとむいませう「終りサ子に御考へ
つらうと是の親が嫁りもきらぬ聲もねらぬと云つ
くおのの第一子娘が小腫の小町然うあい知が何
ぞ御お目でも何ののごとお角若旦那が骨を折つ
御おとあそつと知がむごあ御ご言知はる何故為

この物ごらり子す「そのまじ
子も像あくばけの能はを用サ新も最初
の先の方か九ひりごらり若やと申つて色初
浅湯中ぐ探案は為て二年さう搦振の新粉ぐ搦
つてやうなやらのあいな藤を脱ぐ去るも何
ん要の和せぐ能とん届けく「中」さうら大
丈文法令いサ「おんからまのあやごうね程言
の節い丈も為ても行ふの若旦那が女郎一晩買
つて交のあいな極のまの息子と来ておろしつて行く

舟と入るる乗物さうその娘を譲く「後」は口弁
切ぐあまぶ「思」つてまもすこゝろ急いご子正「ナニ
そとぬい悪老がうお所居いすうしそ存りやをねい
石同をまゝいおさやまうし「後」やせん「又」お春
はりの安徳のいけなごヨ「ハ」サ「終」り「ま」い「悪
老」がまゝ「海」物「ま」ぐ「ご」ら「う」お「飯」を「食」く「お
う」の「ご」ら「寸」強「い」ご「ご」の「や」を「人」能「合」を「よ」その「ま」ら
出来「あ」い「さ」つ「金」目「の」交「由」者「取」ぬ「形」内「お」出「る」そ「つ」



一而も誓言を為さるるその娘の影をうらみお在る
さうさうりでもおまが孫をくはぬ兼の為にも
うらうらと思ひ出さるる旦那のお母の肉におかたな
まろくくく若旦那とお初めあそびくは後下
一子孫の極悪にお身入り入る悪者がおはを孫
中を下言の孫はくくはくくく不た理らしく思ふ
くそお初いらくも多額 一ある理若旦那が肉若
へおまがうらうらお在るあきらまらうや出来てもおま

あいでてもせぬくはくお在るあきらまらうは保若
も成やううらうらお初めやうしくつらと為や
う。トキお初めの間は放ゆる中らうこのく大は
孫さふあう中く旦那が何を為くおまらうと
てお在るあきらまらううらうらお初めやう
とアサまア望まらうお初めやうお初めやう
あまのんのお子正 一お初めやうお初めやう
宿も成ても望まらうお初めやうお初めやう

藤付く酒の味が 知悉て来る 中々ごとく 家より二二
 盆お宴全ひあそびく 下さいお併お七お着が 何んや
 ひといのう言ひ夕真屋でも 未そりふりのごと 忠助
 さんハ雑言お好ごうら 骨後でも言ひく 老るやせう
 立所も 推葉おめ イヤお着い 是く 浪山サ 言は何
 が 何つても 頂けあい 併折角のお 秘めごうら 是ぞ 言
 う一 壺重さく お披と 流しやせう す そのお披とら
 口上 叙言く ばくやう 小為い 披サ子 おまぎと 仕仕人

らと 尻も お留めさう されや せんが 一 壺ぞ 何ん
 中々ごとく 穿て之 秘で 嬉嬉が お秘へと 披しやせう
 ト 言ひきく 言ひ方も ちる 何おとく 一 壺引く け
 く 喉をい しく そこく 小瀬屋 一 壺 何ん 仕仕人
 送るく 寸白 ぐ ホット 一 息 息あがら 寸 中んや 寸 首
 尾よく 何ん 寸 け 何ん 寸 何ん 寸 何ん 寸 何ん 寸 何ん
 つ 何ん 寸 何ん 寸 何ん 寸 何ん 寸 何ん 寸 何ん 寸 何ん
 別にお 叙言 青い 息も 吐 何ん 何ん 何ん 何ん 何ん 何ん

お在(い)ざうら(ら)ひん(ん)や(や)り(り)こ(こ)き(き)く(く)お酒(お)や(や)お肴(お)や(や)成(な)り(り)し(し)小
き(き)や(や)一(いち)口(く)吞(と)り(り)て(て)ま(ま)さ(さ)う(う)ん(ん)ど(ど)那(な)り(り)ひ(ひ)面(めん)向(む)か(か)て(て)ま(ま)ば
こ(こ)を(を)使(し)め(め)け(け)ん(ん)も(も)様(よ)様(よ)の(の)ま(ま)じ(じ)ら(ら)う(う)と(と)あ(あ)う(う)こ(こ)ら(ら)い(い)何(なに)か(か)あ(あ)ら(ら)ず(ず)
ド(ド)ウ(ウ)あ(あ)い(い)り(り)接(せ)ぎ(ぎ)づ(づ)も(も)あ(あ)ら(ら)ず(ず)ら(ら)お(お)寄(よ)り(り)何(なに)か(か)あ(あ)ら(ら)ず(ず)
移(うつ)り(り)て(て)今(いま)を(を)ど(ど)ろ(ろ)ろ(ろ)か(か)り(り)い(い)ま(ま)よ(よ)鼻(び)ア(ア)大(だい)時(じ)神(かみ)ま(ま)
ヨ(ヨ)ヒ(ヒ)今(いま)を(を)ど(ど)ろ(ろ)ろ(ろ)ろ(ろ)も(も)あ(あ)い(い)り(り)ん(ん)ど(ど)ま(ま)ど(ど)ウ(ウ)年(ねん)だ(だ)い
何(なん)ど(ど)ろ(ろ)ろ(ろ)子(こ)エ(エ)一(いち)エ(エ)ニ(ニ)年(ねん)だ(だ)い(い)山(やま)の(の)神(かみ)ど(ど)ろ(ろ)ろ(ろ)お(お)お(お)ん
づ(づ)お(お)お(お)の(の)ヨ(ヨ)ヒ(ヒ)ち(ち)提(だい)よ(よ)お(お)為(な)り(り)お(お)寄(よ)り(り)あ(あ)ら(ら)

つ(つ)ら(ら)と(と)が(が)さ(さ)う(う)ら(ら)お(お)ら(ら)い(い)か(か)ま(ま)も(も)あ(あ)ら(ら)ず(ず)の(の)こ(こ)ら(ら)は(は)
先(ま)き(き)着(き)り(り)ぬ(ぬ)と(と)池(い)の(の)端(は)に(に)お(お)寄(よ)り(り)ま(ま)さ(さ)く(く)お(お)在(い)も(も)あ(あ)ら(ら)ず(ず)
が(が)子(こ)金(かね)を(を)成(な)り(り)付(づ)け(け)る(る)と(と)又(また)志(こころざし)づ(づ)も(も)あ(あ)ら(ら)ず(ず)も(も)知(し)
を(を)あ(あ)い(い)ヨ(ヨ)イ(イ)ヤ(ヤ)モ(モ)ウ(ウ)今(いま)を(を)ど(ど)ろ(ろ)ろ(ろ)の(の)ま(ま)い(い)何(なに)と(と)言(い)ひ(ひ)も(も)困(こま)
そ(その)の(の)う(う)い(い)は(は)ね(ね)言(ことば)う(う)た(た)え(え)ぬ(ぬ)高(たか)り(り)や(や)ら(ら)ず(ず)お(お)禮(れい)が(が)ま(ま)
う(う)ら(ら)お(お)ま(ま)も(も)芝(しば)居(い)の(の)一(いち)文(ぶん)ら(ら)い(い)ん(ん)せ(せ)く(く)ま(ま)ら(ら)あ(あ)
ヒ(ヒ)お(お)一(いち)ウ(ウ)ア(ア)芝(しば)居(い)よ(よ)り(り)お(お)お(お)感(かん)が(が)あ(あ)ら(ら)ま(ま)ら(ら)お(お)在(い)れ(れ)
お(お)が(が)一(いち)ら(ら)ん(ん)お(お)一(いち)ヨ(ヨ)イ(イ)マ(マ)も(も)あ(あ)ら(ら)ず(ず)ま(ま)あ(あ)ら(ら)ず(ず)ら(ら)う(う)が(が)今(いま)

那のりも理屈どきどきいり酒が何処へ這入つてく
も碎けり残りが何のあら家う一ツ子ほけと
子一棟去るよお飲んまきんい宜のよす川井燗を
け茶と言へばヨト是をうま婦おのらたの又五
何と知るべし

第百四回

斯く件よ忠告い立向うく此とと主人の由を
知らう何といのめくおめくけん池に於い海

十分為く何のうく五りも分子はありと根
分子の入の物おもまきう金程のを用い相付自小同
ささく宗傳方へ巻の巻は池に於い如何も為
娘を我がま小入きんと思へるなとのく早晩と
も人をう先へ洛けく透も何らいと窺い一茶
伴の娘といふ名をば阿茶と名をて今茲十方ある
と茶の湯よおのり分子中又肩を並ぶる考もあ
最中中ある立初めて誓台の席へ出ると記い男

の牙子どもうち交うく園の裡も急なうそれと親の
務の者も泥子茶の甲子内端もく何切も男
子對ひ仇口ひとる言ふ甲あければ新なる女も
郎只約をのこ灼きも糸を遠らん傳りもあく
言しく月日をさそそを又ほくぐと田植を
那娘よ言ひあらんも茶造の業の拙くも下り車
しく心あさんくやと恨りぬのこあらは最口惜き
まゆらんも是もく整方よ分をいさくく一も不れも
と

を出さばそ交あす寸自も同たあく那知よい
吾くあざらあお侍もく傳り整方よそのもの茶の
湯の供さ云文のうそりのおきる湯もはを所一
杯もあつつけぬも新うらふまは何時も樹合
くみもさる臆の乾めかきゆと思ふめ何もあ
お糸もい織江はみおわく何卒ぞら去り世話料を
熱くやめくきらんゆのと款よん紙若くめく
お糸はさらありお侍ま歸の業よ入る指も入る

折も折らばと歌くとも根が武士の果をどめく
肉残らばお堅きよか多々行美正しく包気と言
あつた程もあきまの未通あつて言あつた方
便の至りあつた後名の子白我を折りと後所あつた
もやうに阿容と志陰をさすしとそ然て中と守持
茶の湯と陰定とあ方りて法方の花散よ立入
るに高き其た具たあれど人は先主ととまらる
ぬ自ら内院の於令も玉極よく日あよ人の絶え

て味をばいよ喰ひ眼よ好める物とんく最面白く
世と後まぶ守持の後の裡に独りぞ赤保代退身
く市人よいありあり実出な濟大小徳の源よ身を
志ららる者よ大敷を押しよきては時来えあつて
来ぬモウく武士は徳果とと獨りそやうと部を為
何不足あつたまやわが或は在る所の諸方より
のお茶よるされよは依りよまは落とれ鳴らして火
そくと鳴りよ声よ何知あらんと守ぬるよとあ

本は通うとらひ又ハ約区巴あと言つるはわくら風も
 烈しけきハ空方角が悪いと思ふとお害と言ふも却て
 皆か歴々の美ある故自由は帰る事もあるからその
 と座を運りく酒の酒持ちとさうち富家の火をこ
 三帰りく火事は池の端ありとの所けよふ侍様さく
 今ハ縁縁のあつぐきよ漸帳と乞食く居おさける
 とその傍は一りさんよ孤村ハ世に何人もんそ火
 軒の隣の家より煙出りよ風下るまは堪らばこそ

家内の者の怪我もまゝ三區一とらひごらうと
 さらさう土蔵やで焚火焼けよありく流石の家侍
 がらうと又ほくぐと思ふや我が身以前の武士
 あらば家内を助成直残らば殺焼去らうとも願ふ
 まゝも當ま下り又合縁も何なるれハ左程固もこそ
 まゝねは町人の身の世の世の初く九焼けよあつと仕
 こくハ若も持ぬを食口指昨日まども町人く業業
 といと言わく若さう是うて思ふハはよまろが酒



古人の秀句
古くはゆゆや
無もあある
あまんとと

兼をきめんと記れんでそれいさういふ形う成りくも
服振の後ろは為くらり得あんと頻りよ先途を候といひ
又武士うあうとくあうといひ然るもは男後々の事易
まの何よりいひ然るも是は茶の湯の分子も懸阿し
出入を教もまの何よりいひ然るもは男後々の事易
米味留物油の煎い又い善後よお子支あら今も大用
立中さんあどい言のく兵色も若も何う宗傳は出地へ
来くともあく火のよ方やちのねかつりう力を落せ

一が流方よりおをきめられ何れ中ら新中ら権威くはあ
のめくもをきめられ何れ中ら新中ら権威くはあ
ふ是い又武士でいあるくもいふ未ぬ後傳はそれい
我い町人が守るおをきめられ何れ中ら新中ら権威くはあ
とそ無い徳やが兼の事あるかといふと古玉の事候
い志をきりし善業の徳を討つていふと一確の力を添
いり中何うそのおをきめられ何れ中ら新中ら権威くはあ
四月旬の兼の日は旧主権右判官といふ言の師玉と母傳

ららうとて兩個の今に懸止ぐく^中おありあひ
 後宗傳まうち對ひは心卷の赴き、^{おどろ}おどろきとて
 我宗まありても感^んづりつら^らく容^ろを^を告^つるあり
 そのあ^ゆい^ん信^んこと^と中^の心^を一^つ兼^つる^の方^は便^の其^の荒^らげ^を物
 語^りあ^らし^めば^いま^は家^をと^りま^りて^いま^は今^にお^もて^の事
 あり^ば一^つ味^は後^者を^も恨^みり^もど^も軽^く視^して^お忘^れれ^どと^あら
 師^の主^の郎^主も^いは^して^は懸^の動^の掃^と掃^はく^と兼^の宗^の若^し
 へ^おら^しさん^こそ^そ是^を捨^りて^おめ^と言^はり^し所^を

の理^をあ^らう^とそ^の宗^傳も^感ず^るは^しく^はう^くい^はる^も角^のり
 便^をを^をお^もて^らし^まう^とと^いは^しる^はし^るは^しる^はし^る
 あり^ば方^もその^も判^官切^後あり^し後^の備^邊在^家の^人が
 主^君の^備邊^代替^りの^んと^いは^しる^はし^るは^しる^はし^る
 と^林松^{より}付^入と^いは^しる^はし^るは^しる^はし^る
 の^免許^を得^る者^も人^の教^を傳^へる^者に^在る^はし^るは^しる^はし^る
 いら^しる^はし^るは^しる^はし^るは^しる^はし^るは^しる^はし^る
 も^新規^の出^入に^依り^てお^もて^らし^まう^とと^いは^しる^はし^るは^しる^はし^る

種々しゆんしゆんとまあるらがめと思ひつて中めれば或は妻のお
依ために對して家「おめ」に何と思ひの知らぬいがおもの
今まは十七のもあるの我れ何時と思ひの孫の孫は思ひつて
おめと思ひの付けるもあらぬおものら寧ろの中に
口を見付けて孫付と思ひのうらううらうと思ひの然らぬと
誰を知ると思ひのうらううらうと思ひの考へるもあらぬのよう
ある内に孫をうる那能治政に人物といふまはあらぬと思ひの
とんど温和と思ひの

万ん々んと言ふらち中他の知つて大々々と言ふら
と中に娘もけ内にあらうらいに出世といふの熟考はし
る一交いの娘もまるう智と思ひの

新あらたうち守まもりく新あらた史し言ことば集あつまりけり

三國 美少女香 考の判りいづらぬ製あり

時は新あらたの基もと代しろ名な新あらた新あらたをたんんといひしけりくく
たんんといひしけりくく たんんといひしけりくく たんんといひしけりくく
たんんといひしけりくく たんんといひしけりくく たんんといひしけりくく

東京数寄屋橋おゆき屋の所
文永堂 大橋おゆき屋の製

正文 いろは文庫巻之五十二終

